
先輩 ～コナン哀ものがたり・番外編 2～

サブラピッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

先輩 〜コナン哀ものがたり・番外編2〜

【Nコード】

N7094C

【作者名】

サブラピッド

【あらすじ】

帝丹中学校に入学した真奈は、友達もできず、イジメを受けていた。そんな彼女は、ある日、学校の図書室で大人びた先輩に出会う。

（前書き）

中学生コ哀です。抵抗のある方は、ご遠慮いただいた方がいいと思います。

彼女、久津川真奈は、中学１年生になる年の４月、父親の転勤のため、この地に転居してきた。そして、帝丹中学校に入学している。

自分でも、おとなしいと思う。体を動かすことより、本を読んだり、イラストや漫画を描いているのが好きで、人付き合いも下手。成績も中程で目立たず、おまけに、中学入学前に転居してきたということで、この地域に小学生時代の友人がいない。帝丹小学校卒の生徒たちのように、入学当初から、多くの小学時代からの友達がいるという状況ではなかった。

そして、日が過ぎるにつれ、クラスのなかでも、なかなか友達ができない彼女は、次第に孤立し、嫌がらせやイジメを受け始めていた。

真奈にとっては、授業時間はまだいいが、休憩時間や放課後は、次第に苦痛の時間になってきた。

休憩時間に、本を読んでいると、数人でこちらを見て、あからさまにクスクス笑ったり、指をさしたりしている女子。

本を読んでいると、強引に覗き込んでくる男子。おとなしい彼女には、怒って怒鳴ることもできず、本を閉じて教室を出るくらいしか、対抗手段を持たなかった。そして、席を空ければ空けたで、鞆にイタズラをされたり、教科書がその辺に散乱していたりした。

放課後は、図書室で本を読むのが日課だった。

そのまま帰っても、クラスの人間と同じ道になり、イジメを受けることもあったし、何より、学生の特権は、図書室を自由に使えることだと、真奈は思っていた。

その日、真奈は、窓際の4人がけの机で、本を読んでいると、声をかけられた。

「ここ、いいかしら？」

顔を上げると、赤みかがった茶色い髪を揺らし、碧い瞳が印象的な上級生の女生徒が、分厚い本と鞆を手に微笑んで立っている。

「え。ああ、どうぞ」

真奈には、そう言うだけで精一杯だった。

「ありがとう」

彼女はそう言うのと、真奈の向かいに座り、筆記用具とノート、それに真奈には、何が書いてあるのか、わからない分厚く、古そうな本のページを開き始めた。

校章と3年A組を示す胸章、名札には「灰原」とある。彼女のことが何か気になったが、真奈も本に目を落とすと、本の内容に夢中になっていった。

「哀」

声がしたので、なんとなく顔を上げると、彼女の隣に、同じクラスの胸章をした「吉田」という女生徒が座っていた。図書室なので、ヒソヒソ声で話している。

「ごめん。親戚のおじさんがウチに来てさ、お母さんが早く帰ってこいって言うからさ、先に帰るね」

「そう。わかったわ」

「えへ。彼と二人つきりで、仲良く帰ってね」

「歩美」

彼女が同級生を軽く睨んでいる。睨まれた「吉田」は、イタズラっぽく舌を出し、真奈の方も見て言った。

「ごめんね、邪魔しちゃって」

「いえ」

「ほんと、ごめんなさいね」

二人して、真奈に謝ってくる。真奈は、微笑みを返すのが精一杯だった。

「彼」か。

この綺麗な上級生には、きっと似合いの彼がいるのだろう。真奈は、少しそんなことを考えたが、また本に目を落としていた。

夕方4時半を過ぎ、図書室も人が少なくなってくる。真奈も、そろそろ帰ることにした。

向かいの上級生に目を移すと、中学生とは思えない大人びた目をして窓の外を眺めている。その横顔は、同性の真奈が見ても綺麗だと思った。

そして、その澄んだ瞳に宿る哀しい影。とても、普通の中学生にはない、何か大きな哀しみを知っている目。真奈には、そう感じられた。

しばらくすると、彼女は、また分厚い本をチェックするように

読み始めた。時々ノートに何か書いている。真奈は、少し躊躇ったが、声をかけた。

「すみません。お先に失礼します」

「あら、帰るの？」

「ええ」

「そう。こちらこそ、ごめんなさいね」

「いえ、じゃ、失礼します」

真奈は、なんとなく、もう少し、彼女を見ていたいと感じたが、熱心に本を読み、ノートを取る姿に、邪魔してはいけないと思い。その場を去った。

その日の昼休み、真奈は、教室を避け、いたずらされないように、自分の鞆も持って校庭の隅、イチヨウの木の下にある丸太を置いただけのベンチに座り、本を読んでいた。

「お前、逃げるのか？」

「鞆もって出て、サボって帰るのかよ？」

声がするので顔を上げると、クラスの男女数人が、真奈を取り囲んでいる。

「へえ。こんな難しい本読んでるんだ」

男子の一人が、彼女の本を取り上げ、本を持つ手をヒラヒラさせている。挟んであった、彼女の好きな写真の絵葉書が舞い上がって、グラウンドに落ちた。

「あ」

真奈がその絵葉書を拾おうと、グランドの方へ行きかけると、誰かにその足を引っ掛けられ、その場に転んでしまった。周りで、クラスの子供達がゲラゲラ笑っている。その時、今まで堪えてきた感情が噴出した。涙が後から、後から沸いてくる。ただ、情けなく、腹立たしかった。

「ほい。これ、大事にしてんだろ？」

グランドに座り込んで泣いていると、声がした。その聞き覚えのない声に顔を上げると、眼鏡をかけた上級生の男子が、その絵葉書を真奈の方に差し出している。

呆氣にとられ、涙がまだ流れている顔をさらしたまま、受け取れずにいると、彼は、イジメに加わっていた男子の手から真奈の本を取り上げ、絵葉書を本に挟みこんだ。そして、真奈の手を取り、本を握らせてくる。

今まで、真奈をイジメていたクラスメイト達も、呆然とその場に立ち竦んでいる。

「ほら、立って」

眼鏡の上級生、胸章には、3年A組「江戸川」。彼が真奈の手を取って優しげに微笑んでくる。真奈は、促されるまま、ゆっくりと立ち上がった。

「末田。おめえ、イジメなんかやってんじゃないよ。他のヤツも、もう、イジメなんてやめろよな」

眼鏡の奥の大人びた大きな瞳。鋭い光を放ち、他のクラスメイトを睨む。

「江戸川さん」

末田が彼の名をそう呼んで、すいませんと、頭を下げている。

「謝る相手が違っただろ？彼女に謝れ」

末田が真奈の方に向き直った。

「ごめん」

ぺこつと頭を下げる。同じ部の先輩に言われ、仕方なく頭を下げて
いるだろうことは、真奈にもわかった。

「えっと、君、末田と同じクラスなら1Dか。名前は？」

「久津川真奈です」

消え入るような小さな声で返事をする。

「俺は、江戸川コナン。3Aだ。末田と同じ、サッカー部だよ」

別にサッカーに興味もない真奈でも、その名を聞いたことがあつた。中学生ながら、Jリーグが注目するサッカー選手。

明るく、顔もルックスも合格点以上。それに、同年代には見えな
い、大人びた雰囲気があつて、女子の興味を惹くタイプだ。そうい
えば、図書室であつた灰原という上級生にも、同じような雰囲気が
感じられた。

「とにかく、イジメはやめろ、な」

人気の上級生にそう言われ、クラスメート達は、そろそろ教室
へ戻っていく。真奈は、頭を下げ、何か言おうとした。

「もう、授業始まるぜ、早く戻って。じゃ」

その大人びた上級生も、教室へ戻っていく。彼が見せた子供のよ
うな笑顔。その笑顔が大きく真奈の胸に残った。

その日の放課後も、真奈は図書室に来た。

ただ、閉じた本を前にして、ボーッと外を眺めている。彼の、昼休みに自分を助けてくれた江戸川コナンの笑顔をずっと思い出していた。

（え。これって、あの先輩を好きになったってこと？）

真奈には、自分の心に芽生えた恋心をどう扱っていいのか、まだわからなかった。

「あら？また、あなたなのね」

聞き覚えのある声。「灰原」だった。

「あなた、久津川さん？」

真奈の名札を見て言う。

「はい。この前は、すみませんでした」

「どうして？何も謝られるようなこと、された覚えはないわよ」

深く碧い瞳に吸い込まれそうな感じの優しい表情。真奈は、なぜか顔が赤くなってくるのが自分でわかった。

図書室の静寂が真奈と上級生を包む。いつもなら、真奈は、4時半頃には帰っていたのだが、この日は、なんとなく、その席を立つのが惜しくて、下校時間の5時まで座っていた。

5時の帰宅を促す放送が流れる頃、図書室の入り口が開けられ、

見覚えのある、いや、それどころか、今まで、自分の頭の中にいた人が入ってきた。

（江戸川さん）

彼は、なぜかこつちへ歩いてくる。

「！？」

「帰ろうぜ」

「え！？」

しかし、その声は、向かいに座る上級生にかけられたものと、すぐにわかった。

「ええ」

「今日は、なんか買ってくもんあるのか？」

「いえ。夕食の用意は、今あるものでできるし……特にないわね」
「そっか」

話しながら、彼女は、鞆に本や筆記具を入れ、帰る準備をしている。その様子を眺めていた彼がこつちを見た。

「あれ？君、確か1Dの久津川さん」

「知ってるの？」

彼女が彼に訊く。

「ああ。ちょっとな」

「あの時は、ありがとうございました」
真奈が礼を言つと、

「別に……なんもしてねえよ」

と、彼は、頬を手で搔いてちよつと照れている。大人びた雰囲気を持つのに、そのしぐさが子供っぽく、なんだか可笑しかった。

「あら？どこかの正義の味方の探偵さんは、また、女性の危機を救ったのかしら？相変わらず、優しいのね」

彼女が嫌味のように彼を睨んで言う。その雰囲気、江戸川コナシが彼女の「彼」であることがわかった。

「んなことじゃねえよ・・・なあ、久津川さん？」

また、子供のように慌て、すねる表情に、真奈もつい笑ってしまった。

そのまま、3人で外へ出た。途中まで、帰る道が同じのようだ。

「灰原さんの家は、何処なんですか？」

真奈が訊いた。

「米花町2丁目22番地・・・そこが今、私の住んでる場所・・・」

「えっ？あ・・・そうなんですか・・・」

真奈は、昂揚の感じられない、冷たい言い方に、少し驚き、不審に思った。

「おいおい・・・」

彼が苦笑している。真奈にはわからない、何か二人だけにわかるものがあるのだろう。

気を取り直して、彼にも訊く。

「え、江戸川さんは、どちらにお住まいですか？」

「米花町2丁目22番地」

「え!？」

真奈は、また驚いた。

「お隣ですか？」

「いや、一緒に住んでるんだ、俺達」

「ええっ」

今度は、驚きの声を大きく上げてしまった。

「いや、俺達さ、遠い親戚なんだ。それで、事情があって両親が海外に居てさ、親戚の家にお世話になってるってわけ」

「あ、そうなんですか」

真奈は、とりあえず納得する。

「私の両親は、死んだんだけどね」

彼女は、さりりと言った。

「そうなんですか・・・」

両親が亡くなったという言葉に、真奈は、どう答えていいかわからず、しばらく黙っていたが、気を取り直し、冷やかし半分、興味半分で、少し意地悪げに訊いてみた。

「で、灰原さんって、江戸川さんの彼女なんですか？」

「そ。コイツは、俺の一番大事な人。最愛の人ってやつ」

「へ」

あまりにあっさり彼が答えるので、真奈の目が点になってしまった。

「もう。久津川さんが呆れてるじゃない」

彼女は、そう言って口を尖がらせるが、表情は穏やかで、嬉しそうな微笑を浮かべている。

「だってよ、ホントのことだろ・・・この子に嘘つくの、やだし」

真奈は、その言葉を聞いて嬉しくなった。この子に嘘つくのはいやだ、こんなことをさらいというこの人たちは、なんて優しいのだろう。この心の暖かさはどうだろう。真奈も、自然に笑みがこぼれていた。

真奈にとっては、少しの間、その胸に抱いた淡い恋が、あっさり失恋に変わったのに、なぜか、悲しくも、悔しくもなく、ただ、この二人と会えたことが嬉しかった。

「じゃ、私、こっちですから。今日は、ありがとうございました」

「おう、じゃな」

「じゃ、また明日ね」

「はい」

真奈は、二人と別れ、楽しそうに歩き出した。が、しばらくして、フツと足を止めた。

（また明日？今まで、たまにしか会わなかったのに・・・図書室で会えるってことかな？）

疑問に思い、今、別れた二人の方を見ると、遠目に、手を繋いで、何か言い合ってる二人の姿が夕日を浴びて紅く染まって見えた。

彼もまた、彼女と同じように、その瞳に、深い哀しみを湛えてい

るような感じがした。二人は、同じ目をしている。それが真奈には、わかった。

翌日、1時間目の授業が終わると、真奈の教室を訪ねてきた上級生がいた。

「久津川さん、いるかしら？」

「あ！灰原さん！」

真奈は、そう言うと、教室の入り口で自分を探している彼女のところへ歩いて行った。

「昨日は、ありがとうございました」

真奈が彼女の前に立って話していると、背後で、クラスみんなが注目しているのが感じられた。騒がしい休憩時間の教室が、妙に静かになっている。

「私に何か？」

「実はね。今度の金曜日、うちで夕食会をやるんだけど、あなたも来られないかなって思って」

「えっ？どうして・・・」

「あなた、図書室ですつと読んでる本、私も読んだことがあるの。だから、あなたの感想も聞きたいし」

「私なんかが、いいんですか？」

「もちろんですよ。だから誘っているんじゃない。まあ、私達以外は、親戚の変わり者のおじさんと、同じ年の友達3人で、あなたにとつては、年上ばかりだけど。でも、気を使うような人はいないから、気軽に来てもらえると思うわ。都合は、どう？」

「ホントにいいんですか？・・・じゃ、喜んで」

「そう。よかった。じゃ、金曜日、一緒に帰りましょ。そのつもりで居てもらえる？」

「わかりました」

「じゃね」

彼女は、後を振り返ると、右手を上げ、少しヒラヒラさせて、教室を出て行った。

「あれ、3年の灰原さんよね。綺麗ね」

「あの大人びた雰囲気、全然不自然じゃないのよね。それが不思議」
「あの人、いつも全国模試でトップなんでしょ？」

「いいなあ、憧れるなあ。俺も夕食会に呼ばれたい」

「残念だけど、彼氏がいるらしいわよ」

「知ってる。サッカー部の江戸川さんでしょ？小学1年の時から付き合ってた」

真奈は、彼女が結構有名人であることを知った。

「ねえ、久津川さん。灰原さんと知り合い？」

いつもは、自分をいじめるクラスメートが訊いてくる。

「ええ。まあ」

曖昧に返事をしていると、末田がやってきた。

「お前、江戸川さんといい、灰原さんといい、いい先輩に可愛がられてんだな。うらやましいぜ」

ポンと頭を叩くと、ニコツと笑って自分の席の方へ行ってしまった。

（昨日、また明日って言ったのは、ここへ来るってことだったのね。

わざわざ、みんなの前で誘ってくれるなんて・・・イジメのことを気にして?)

真奈は、じわりと胸が暖かくなってきた。

先生にすら一目置かれている3年生二人、その先輩に可愛がられているということで、その後、真奈をいじめようとする者は、いなくなつた。

（後書き）

筆者の中学時代は、クラブに尊敬まで行かなくても、好かれている先輩が何人かいました。

今、思えば、先輩の影響を受けた後輩も、後輩を思いやる先輩の方も、あの時、何かを得て、成長していたんだという感じがします。

そんな、中学時代を思い出しながら、書いてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7094c/>

先輩　～ コナン哀ものがたり・番外編2 ～

2010年10月8日12時41分発行